

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01004

研究課題名（和文）租借地大連・旅順における中国人社会の発展と日中相互関連展開の実態解明

研究課題名（英文）Elucidation of the actual developing situation of Chinese society and the development of mutual relations between Japan and China in the leased territory Dalian / Lushun

研究代表者

松重 充浩（MATSUSHIGE, Mitsuhiro）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：00275380

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果としては、以下の二点をあげることができる。

一つ目は、国内外の関連機関（中央研究院近代史研究所档案馆、公益財団法人東洋文庫等）における資料調査・収集を通じて、日中相互認識に関する画像資料と文字資料を一体的に検索できるデータベースを構築したことである。これは、当該研究における資料環境を大きく改善する成果となった。

二つ目は、市電や建築様式などの都市インフラを主な事例として、日中相互認識が、日中双方の相互変容を内包しつつ展開した点を確認し、大連・旅順の現地社会が単純な二項対立的な構造ではなく相互関連・相互変容を前提とする多様で重層的な構造をもっていることを確認したことにある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、大連・旅順を中心とした中国東北地域社会に関する歴史研究における資料環境の整備を通じて当該領域研究における実証的水準の向上に寄与した点をあげることができる。また、画像資料と文字資料を一体的に検索できるデータベースを構築したことは、分析視角の多様化をもたらし、研究の活性化にも繋がる成果ともなっている。

加えて、その社会的意義としては、上述学術成果を通じてもたらされた現地社会諸事象の多様性・重層性の実態把握により、他者の多様性理解を求められる現代国際化社会において如何にそれを獲得するかの歴史的知見獲得をあげることができる。

研究成果の概要（英文）：The following two points can be cited as the results of this study.

The first is the construction of a database of images and written materials on mutual recognition between Japan and China in an integrated manner through the survey and collection of materials at related institutions in Japan and overseas. This has greatly improved the environment of available materials for applicable research.

Second, using urban infrastructure such as city trams and architectural styles as case studies, it was confirmed that mutual recognition between Japan and China develops while encompassing the mutual transformation of the nations, and that the local society of Lushun, Dalian had a diverse and multi-layered structure premised on interconnection and mutual transformation rather than a simple structure of binary opposition.

研究分野：中国近代史

キーワード：大連 旅順 近代日中関係 租借地 中国東北 関東州 満鉄

1. 研究開始当初の背景

1980年代中盤以降の日中両国間において、ヒト・モノ・カネの継続的往来を通じて、極めて強い相互依存的関係が形成されてきていることは、衆目の一致するところであろう。しかし、それにも拘わらず、日中国交正常化40周年にあたる2012年9月の尖閣問題を契機とする反日デモ以降、両国における相互の不信感は一挙に膨らみ、現在に至るまで十分な改善には至っていない。この状況下、日本では中国に対する無関心や差別を助長させかねない中国イメージの単純化が、中国では戦前・戦中期日本の野蛮で残虐な侵略者としてのイメージが、それぞれ拡大・定着しつつあり、両国の分断・対立局面が強調され、その相互連関・相互変容的側面への関心が低減しつつあるという印象は、大学において中国に関する授業を担当し日中双方の学生に相對している者ならば誰もが強く実感すると言っても過言ではあるまい。

この現状に対する学術的背景における問題の所在を、従来の中国近代史研究あるいは近代日中関係史研究に引き絞って考えると、戦前・戦中期における日本の中国大陸での諸活動と中国側諸主体との関係実態に対する研究成果が、上述した現状に対する冷静な対応と処方箋構築に向けての第一歩となる歴史的知見を提供し得ているか否かという点となる。この点から、当該研究領域を俯瞰すると、確かに近年、久保亨(ex.『戦間期中国の綿業と企業経営』汲古書院、2005)らによる近代中国経済史研究や、高綱博文らの日本上海史研究会(ex.『戦時上海 1937～1945年』研文出版、2005年)などによる上海租界史研究などにおいて、日中の相互依存や相互変容の実相を実証的に追究する試みが展開されているが、本申請が対象とする日本租借下の大連・旅順に対しては本申請の研究代表者などによる萌芽的研究が僅かに存在するだけとなっている。本研究は、この現状を克服することを念頭に計画されたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本租借下の大連・旅順における中国人社会が、如何なる発展実態を持っていたのかを実証的に明らかにすることを通じて、従来の<抵抗 or 従属>という二項対立図式的な理解による諸成果をも包摂し得る、日本側諸主体との相互連関・相互変容により形成された新たな当該地域の歴史像を新たに構築し、時として激しい摩擦を伴いながらも「ヒト・モノ・カネ」の移動と諸制度実態の機能変化が日常的に展開する現代の国際化(globalization)状況下における諸主体の安定的関係構築に向けて何が必要となるのかの歴史的知見の一事例を提供することにある。

3. 研究の方法

本研究の実施にあたっては、主に以下の二つの方法を採用した。

一つ目は、後述する資料調査を前提とした、収集・整理した都市インフラ利用実態に関する資料の分析を通じて、日中間の相互連関・相互変容に実態を解明するという方法である。本研究において、従来の研究で等閑視されてきた大連・旅順の中国人社会が内包したところの日本人(社会)との相互連関・相互変容の実態を実証的に確認する作業は、言わば研究の前提確保と言うべき、必要不可欠なものとなっている。この点に関して本研究では、路面電車、水道、医療・衛生施設などの大連・旅順の都市インフラに実証対象を絞り込みつつ、日中双方の当該施設利用実態に関する諸事実を、期現地で刊行された新聞(『満洲日日新聞』『関東報』『大連新聞』『泰東日報』)や図書、公文書や日記や書簡などの私文書を国内外の関連諸機関(中央研究院近代史研究所档案馆、遼寧省档案馆、大連市図書館、公益財団法人東洋文庫、国際日本文化センター、国立国会図書館、日本大学文理学部)から収集・精査し、当該記録の抽出をおこなう。また、その際、文字資料に限定せず、絵葉書、ポスター、写真などの画像資料も抽出対象に加えて、従来の文献中心研究の資料水準の限界を突破することも図った。加えて、抽出記録はデータベース化し、研究終了後に公開することとした。

二つ目は、国際ワークショップを開催し、そこでの本研究組織外の専門家との討議を通じて、学際的知見の積極的な導入を図り、より多様な視角からの新たな近代大連・旅順の歴史像構築を行うという方法である。本研究は上述した目的を念頭に、大連・旅順の中国人社会の展開過程を日中の相互連関・相互変容の視座から再構成するものであるが、その相互連関・相互変容の抽出には、より多様で重層的な分析視角による検討が必要となり、多様な専門領域からの参加者を招き実施する国際ワークショップは、その確保における重要な機会となるものである。

なお、本研究では、以上の方法を念頭に研究を遂行したが、第2年度目末からの新型コロナウイルス感染症の流行により、国際ワークショップは開催できずに関係者とのオンラインによる意見交換も極めて限定的なものに止まった。また、海外調査に関しても中華人民共和国での調査は

断念せざるを得なくなり、新たな実証的成果獲得の前提となる資料、とりわけ中国側の諸主体によって作成された資料の調査・収集は当初予定した通り進められず、公刊済み中国側資料の調査・収集や日本国内での調査の徹底によりカバーせざるを得なくなってしまった。誠に遺憾であるが、海外との国際交流を必要とする研究課題に関しては、後日を期すこととせざるを得なかったことを付言しておきたい。

4. 研究成果

本研究の成果としては、以下の三点をあげることができる。

一点目は、国内外の関連機関（中央研究院近代史研究所档案館、公益財団法人東洋文庫、国際日本文化センター、国立国会図書館、日本大学文理学部）における関連資料の調査・収集を通じて、現地定期刊行部（『満蒙』、『満鉄調査時報』など）の日中相互認識に関する記事の目録や、画像資料と文字資料を一体的に検索できるデータベースの構築を行ったことである。これらの成果は、大連・旅順を中心とした中国東北地域社会に関する歴史研究における資料環境の整備を通じて当該領域研究における実証的水準の向上に寄与するものとなっている。

また、画像資料と文字資料を一体的に検索できるデータベースの構築をしたことは、文字化されることなく視覚的知見に止まっていたデータを、その両者を連関づけることで、歴史像再構築に資するデータ化するものであり、ここでも新たな実証水準を準備し得る資料環境の構築に寄与し、当該領域の研究活性化にも繋がる成果となっている。

二点目は、多民族居住地域でもあった中国東北地域社会が清代以来内包していた多様性と諸主体間の相互連関・相互変容の有り様を、清朝初期から民国初期にかけての中国東北地域に関する先行研究の詳細な再検討を通じて抽出した点である。この点を抽出できたことは、20世紀の当該地域の変容を、異なるものの相互連関・相互変容を通じて現出するという前近代からの連続性の下で再構成することを可能とする視座の獲得を意味しており、当該地域の変容を長期的な時間軸の中で位置付けることに道を拓く成果となっている。

三点目は、以上の二つの成果を前提としつつ、市電などの都市インフラを主な事例として、当該地域の変容が、日中双方の相互変容を内包しつつ展開した点を実証的に確認し、従来の〈前近代 - 近代〉といった二項対立（二者択一）的な歴史像の刷新に繋げる成果を得たことである。具体的には、日本を象徴するインフラの一つである大連の市電（路面電車）に対する中国側の位置付けが、当初の排他的あるいは敵対的認識の喚起対象から、その利便性を槓杆としつつ、自らの発展にとって所与の条件との認識へ移行し、更にはそれを運用する主体としての（別言すれば、自らこそがその正当な管理運用者・利益享受者であるとする）自己認識を、日本側に対する潜在的反発を内包しつつ、形成したことを明らかにした。この一連の経緯は、新たに登場した事象を、それが持つ利便性を槓杆に既存認識に言わば「接ぎ木」しつつ「新来 - 既存」の両者を包摂する新たな認識形成を行い、それを自らの「伝統」として再認識して行くという、清朝以来の歴史継承的に形成されてきた認識パターンを踏襲するものであり、現地中国人社会の展開が、単純な日中間の二項対立的な構造ではなく相互連関・相互変容を前提とする多様で重層的な構造を内包する形で進んで行ったことを確認する成果となっている。それは同時に、現地社会諸事象の多様性・重層性の実態把握・理解を強く求められる現代の国際化社会において、他者の多様・重層性を如何に発見・獲得するのかについての、歴史的知事例を提供するという成果ともなっているとも考えられよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塚瀬進	4. 巻 31
2. 論文標題 清代満洲史を研究した川久保悌郎の業績について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 News Letter (近現代東北アジア地域史研究会)	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚瀬進	4. 巻 78
2. 論文標題 書評：上田貴子『奉天の近代』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 212-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚瀬進	4. 巻 245
2. 論文標題 書評：張曉紅『近代中国東北地域の綿業』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と経済	6. 最初と最後の頁 54-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 500
2. 論文標題 日本大学文理学部における「満蒙」関係諸記録の収集と保存および公開の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 善隣	6. 最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 726
2. 論文標題 東北アジア地域史から考える「満洲国」(1932~45)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 42
2. 論文標題 荒木貞夫の口述記録 - 「シベリア出兵」について - :校注	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代中国研究彙報	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚瀬進	4. 巻 32
2. 論文標題 台湾でマンチュリア史を研究した趙中孚の業績について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 News Letter (近現代東北アジア地域史研究会)	6. 最初と最後の頁 121-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚瀬進	4. 巻 45
2. 論文標題 清代吉林における統治機構の変化と旗人の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア史研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 43
2. 論文標題 『満鉄調査時報』（1919年12月～1931年8月）華中・華南関係記事目録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代中国研究彙報	6. 最初と最後の頁 107-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松重充浩
2. 発表標題 日本大学文理学部におけるビジュアル資料の収集について
3. 学会等名 公開シンポジウム「日本大学文理学部におけるビジュアル・メディアの収集と活用：実例から見る修復、保存、管理、公開における課題と未来」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松重充浩
2. 発表標題 満洲事變之前在大連の日本人社會對蒙古的認識：以大連刊行的日語媒體為中心
3. 学会等名 中央研究院近代史研究所學術演講（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松重充浩
2. 発表標題 大連日本語メディアが伝えたシベリア出兵と現地政況（その1）：『満洲日日新聞の分析を中心として』
3. 学会等名 シベリア出兵史研究会第5回
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松重充浩
2. 発表標題 在大連日本側メディアにおけるシベリア出兵認識 - 『満洲日日新聞』（1918年9月-1920年12月）掲載関係記事を事例として -
3. 学会等名 2020年度ロシア史研究会大会： <パネルB> 「シベリア出兵を見直す：人々の対応を通じて」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 塩澤珠江著、松重充浩監修	4. 発行年 2020年
2. 出版社 草思社	5. 総ページ数 160
3. 書名 全体監修及び第1章満洲篇解説、『吉田謙吉が撮った戦前の東アジア：1934年満洲 / 1939年南支・朝鮮南部』所収	

1. 著者名 松重充浩（分担執筆）、加藤直人、陳登武、張哲嘉、金山泰志、林志宏、中田崇、朴敬玉、日吉秀松	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本大学文理学部情報科学研究所	5. 総ページ数 283
3. 書名 全体監修及びはじめに、おわりに『東アジアにおける認知空間の諸相 - 具現化される 帝国 : 理念、身体、メディア』所収	

1. 著者名 松重充浩（分担執筆）、久保亨・瀧下彩子編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 財団法人東洋文庫	5. 総ページ数 370, pp.227-240
3. 書名 大連日本人社会における「華中・華南」情報：総合雑誌『満蒙』を事例として・「附表」、『戦前日本の華中・華南調査』所収	

1. 著者名 塚瀬進、ボルジギン・フスレ編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 152, pp. 23-36
3. 書名 「溥儀研究をめぐる近年の動向」 『国際的視野のなかの溥儀とその時代』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	塚瀬 進 (TSUKASE Susumu) (80319095)	長野大学・環境ツーリズム学部・教授 (23602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------